

富山県小杉町・大門町
小杉流通業務団地内遺跡群

第14次発掘調査概要
No. 15 A 遺跡

1996年3月

富山県埋蔵文化財センター

序

昭和52年度に工事計画が具体化した小杉流通業務団地造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、これまで多数の遺跡の調査を実施してまいりました。

今年度の調査を含めると、調査年次は14回を数え、遺跡数は26遺跡、調査総面積は約8万m²となりました。

これらの調査の結果、先土器時代の良好な石器群をはじめとして、中世までの遺構や遺物が数多く検出されております。特に古代の須恵器生産及び鉄製造とそれに関係する遺構・遺物が多数出土し、全国的にも注目されました。

中でも、小杉丸山遺跡では、飛鳥時代後期の瓦と須恵器を同一の窯で焼いた瓦陶兼業窯が検出され、さらにその供給先も判明した事などにより平成2年3月に国指定史跡となり、現在史跡整備中です。

このように、当地域の古代史が少しづつ明らかになります。

今回の調査では、古代の工人の住居跡とそれに関係したと考えられる多くの遺構と遺物が検出されました。

本書は、こうした調査の成果をまとめたもので、今後の研究を進める上で役立ていただければ幸いです。

終わりに、調査に際しご協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各機関の各位に厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

富山県埋蔵文化財センター

所長 桃野真晃

例 言

- 1 本書は、富山県教育委員会が、平成7年8月～10月にかけて実施した小杉町流通業務団地（以下流閉と略す）内遺跡群の第14次調査で、No.15A遺跡中央地区の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、流通業務団地造成工事に伴う調査として、県上木部の依頼により富山県埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
- 3 遺物整理作業などは、埋蔵文化財センターで行い、調査事務は、企画調整課が担当した。
- 4 発掘調査のなかで人力掘削などについては、工事請負方式をとり、県土木部が発注し、株式会社高田建設が請負った。また、写真の一部は株式会社アジア航測が請負った。
- 5 調査遺跡の面積・期間・担当者等は、以下のとおりである。調査期間：平成7年8月2日～10月31日まで実働25日間
調査担当者：富山県埋蔵文化財センター 主任 橋本正春 調査面積：2,500m² 所在地：小杉町青井谷字丸山
- 6 現地調査・本書の作成・遺構図面などの記録資料整理・遺物整理事業などは、調査担当者が行い、次の諸氏の協力を得た。田島美和子・岩井洋子・中沖恵子
- 7 発掘調査にあたっては、下記の諸氏の協力を得た。記して謝意を表したい。
富山県土木部・富山県土地開発公社・小杉町教育委員会・小杉町シルバー人材センター・大門町シルバー人材センター・青井谷地区他
- 8 本書の作成までにあたっては、下記の諸氏の貴重な指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。
岡本淳一郎・麻柄一志・高慶孝・原田義範・種垣尚美・山口辰一・吉井亮・伊藤隆三・荒井 隆
- 9 本書の作成までにあたっては、下記の諸氏の貴重な指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。
- 10 國版類の縮尺は、國版下に示し、方位は真北を、高さは標高を用いた。遺跡座標X30Y40の国家座標はX76819.926Y-8104.441であり、遺跡座標のX軸は真北である。表中では、省略表現したところがある。土層の色名などは、日本土壤学会刊「標準土色帳」に基づいている。遺物番号は、全て通し番号とした。
- 11 平成7年度の発掘調査関係の資料及び出土遺物は、富山県埋蔵文化財センターが保管する。

目 次

序	例言	
I	序章	1
1	遺跡の位置と環境	1
2	調査の経緯と経過	1
II	調査結果	2
1	遺構と遺物	2
(1)	古墳時代及びそれ以前	2
(2)	古代	2
(3)	中世以降	2
III	調査の結果	5
IV	参考文献	6

図版・写真・表目次

- 第1図 小杉町周辺の遺跡 (1/50,000)
第2図 流団内の遺跡 (1/25,000)
第3図 №.15A遺跡の試掘区と調査区 (1/1,000)
第4図 遺構概略図 (1/600)
第5図 遺構実測図 1.SB118 2.SB135 3.SB200 4.SK225 (1/80)
第6図 遺構実測図 1.SD106 107 205 231 2.SK134 137他 (約1/100)
第7図 遺構実測図 1.SB201 2.SB203 3.SB206 4.SB207 (1/80)
第8図 遺構実測図 1.SD213 2.SK218 3.SK251 4.SK210 5.SK204 214 220 224 253 (1/80)
第9図 遺物実測図 SD106 107 205
第10図 遺物実測図 SB135 200 201 203 207 SK206
第11図 遺物実測図 SK214 208 218 224 225 246 251 XY
図版1 遺跡全景 1.東より 2.北より 3.西より
図版2 1.SB116 118 他東より 2.SB135南より 3.SB201南より 4.SB203東より 5.SB207南より 6.SB206東より
7.SB206出土状況 8.SK214南西より 9.SK214南より
図版3 1.SK225 226南より 2.SD213南より 3.SD213出土状況 4.SD106 107 205 231 SK134 137他東より
5~9.SD106他出土状況
図版4 出土遺物 SD106 107 SB135 200 201 204 SD205
図版5 出土遺物 SB203 206 207 SK214 215 218 SD213
図版6 出土遺物 SK223~225 246 XY
表1 調査工程
表2 進行状況
表3 №.15A遺跡の主な遺構・遺物一覧表
表4 平成5~7年度調査遺構一覧表

I 序章

1 遺跡の位置と環境

小杉町は、富山県のほぼ中央部に位置し、町の南に小杉流通業務団地がある。遺跡は、流団の東端で、山地形から平野部に移り変わる地点に所在している。町内の遺跡数は、平成5年度の遺跡登録では約300遺跡である「埋セ1994」。先土器時代の遺跡では、小杉丸山遺跡、縄文時代では上野遺跡、弥生時代及び古墳時代では、中山南遺跡、古代及び中世以後では、日宮城跡などがある。

なお、遺跡の位置と環境及び調査の経緯と経過などについての詳細はこれまでの第1~13次の報告書を参照願いたい。

2 調査の経緯と経過

流団造成計画は、昭和48年度に県が事業主体となり、トラックターミナル基地を造成するとして予定された。計画提出後、県教委と開発部局側とは保護措置についての協議を重ねた。また、一方で計画地内の分布調査を実施し、新発見遺跡を含む結果を公表した「県教委1976」。

昭和52年度からは、No.20遺跡の調査が開始され、26遺跡の調査を実施してきた。No.15A遺跡は、分布調査当初では一つの遺跡とされていたが、昭和54年度の試掘調査でA・Bの二遺跡となった。その後、遺跡近辺で工事が計画されなかつたためしばらく調査をしなかった。しかし、造成工事の途中で工事側は、遺跡の調査を実施しないでNo.15A遺跡の北側半分に建物を建設し、遺跡の半分を破壊してしまった。そこで、残された部分については縁地帯で残ることにした。そしてその後の平成3年度第11次No.18B遺跡調査で流団造成工事に関する調査が全て終了する予定であったが、当遺跡を含む工事を第11次調査終了後に新たに予定したため、平成5年度に遺跡の一部を実施して造成工事関係調査を再度全部終了させる予定とした。ところが、県土木部は、再度新たな工事計画を示し、No.15A遺跡の残された部分全体が工事予定地内としたため、平成6・7年度に調査を実施することとなった。

平成7年春から事前の協議を始め、年度後半に行うこととした。8月初めから調査準備を開始し、調査に着手した。調査は、県埋蔵文化財センターが県土木部の依頼を受けて行い、センターからは、調査員1名を派遣した。調査の前半は、事前準備として立木などの伐採・調査事務所などの整備・現況測量・盛土除去・基本杭打設などを行った後、包含層掘削を行った。遺構検出の結果、遺構は中央部以内に集中し、中央部以東の斜面側は、遺構が僅かしかなかった。調査後半は、遺構掘と記録・写真撮影などを行った。遺構は堅穴住居跡と土坑などが調査区西側斜面地区と中央部で検出された。その後、上空からの全景写真撮影及び測量（写真撮影業者委託）を行ない終了した。

発掘調査終了後に、現地で関係者と県埋蔵文化財センターで発掘調査終了に伴う協議を行い、現地調査は終了した。遺構や遺物などの整理作業は、現地調査途中から実施しており、引き続き報告書作成とを合わせて平成8年3月まで県埋蔵文化財センターで実施することとした。また、遺構や遺物などの記録資料は、県埋蔵文化財センターで保管・管理する。年間の調査行程と進行状況などは、下の表1・2に示した。

項目	月	4~7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月~3月
協議他		事前打合				終了報告		
調査準備他	→							
包含層掘削		→						
遺構掘			→					
写真・記録				→				
遺物整理他					水洗池	→報告書		

表1 調査工程

月 日	内 容	月 日	内 容
4~7月	事前打合	8月3日~	樹木・盛土除去、プレハブ建設
9月2日~	人工作削（包含層掘削）	9月4日~	遺物水洗（現地）
9月12日~	遠景写真・断面図他実測開始	9月18日	包含層掘削・遺構検出終了
9月19日~	遺構掘削開始	10月30日	上空からの斜面写真撮影
10月31日	調査終了打合	11月~3月	遺物・図面他整理、報告書作成

表2 進行状況

II 調査結果

調査の結果、遺構では古代の住居跡・大型住居・溝・土坑他が検出された。遺物では、縄文時代石器・古墳時代土器・石器・古代の須恵器・土師器・金属製品・中世の珠洲などが出土地した。遺構は、調査区中央部に集中していた。調査区東地区では、ほとんど遺構は検出されなかった。遺物は、遺物整理箱で20箱出土し、遺構と同様の出土状況で、遺構内及び周辺が多かった。

本書では、X25Y30～X40Y40区より以西を西地区、X15Y40～X4060Y区までを中央部とし、それより東を東地区とする。

1 遺構と遺物

(1) 古墳時代及びそれ以前

SK218は、調査区中央部でSD213の東側に位置する。上坑というよりは、穴が2個接したものであり、規模は南北が $2.5 \times 2.3 \times 0.4M$ （以下単位のM省略）の方形で、北東は $3.0 \times 1.2 \times 0.3$ の長方形である。84は、土師器高坏で、脚部以下を欠く。口縁部は、破片のため接合していない。器形は、脚部から浅く外側に開いた杯部が鋭く屈曲して立ち上がった後緩く外に開き、再度屈曲し立ち上がり、口縁部となる。口縁部外には、4条の沈線が巡り、外側は赤く朱などが塗布されており、この口縁がつくと推定される。85は、土師器甕底部破片である。86は、碧玉破片であり、遺構覆土を少し掘り進んだ段階で1個を発見したため、残りの覆土を土壤水洗しおかたを検出した。一部に石器製作時に出た破片もある。他に赤石などもあり、87は炭である。時期は古墳時代初頭である。

(2) 古代

古代の遺構としては、竪穴住居跡7棟・住居跡（方形周溝遺構）1・溝2・土坑・穴他が検出され、調査区の中央部から西地区に集中していた。竪穴住居跡7棟は、互いに10～20cmの間隔で点在しており、うち3棟がほぼ同一標高線上に並ぶ。住居跡は平坦面の中央部で、良好な場所に所在している。

竪穴住居跡（SB）は、今回の調査区では、中央部の平坦面に5棟と北西側斜面に3棟が検出された。

SB118とSD119（第5図）は、平成6年度調査で掘り残したもので、住居跡の僅かを今年度調査したこととなる。平面形や規模などは、前年度調査結果を大きく変更するものではなく、〔橋本1995〕を参照願いたい（以下、前年度からの継続調査遺構も同様に参照とし、規模他の記述は省く）。今年度の住居跡出土遺物は、須恵器、土師器小破片があり、床面近くの出土であった。溝出土遺物はなく、時期は7世紀代とする。

SB135（第5・10図、図版4）は、SB118同様平成6年度調査で掘り残したもので、南側の未掘場所を調査した。平面形などは、前年度調査結果とほぼ同じである。今年度の住居跡出土遺物は、須恵器、土師器があり、床面近くの出土であった。17は、須恵器杯蓋で、頂部を欠損しており、丸みのある体部から口縁部となり、端部は直線的に丸く終わる。器形から、6世紀末とする。18・19は、生焼け須恵器杯身破片で、20は須恵器亀巣胴部破片である。21は、土師器体で、口縁部はゆるく外方に伸び、端部を上方につまみ上げる。胴部は、胴がほとんど張らず直線的で、平底の底部となる。22は、土師器鍋口縁部破片で、24は取手破片で、23は土師器亀巣胴部破片である。他に小破片がある。これらの遺物と遺構の時期は、7世紀代とする。

SB220（第5・10図、図版4）は、西地区の邊に位置する。平面形は、方形で、斜面下側の南は確認できなかった。規模は、 $3.6 \times 3.0 \times 0.35$ で、壁は北側が一番高く35CMであり、周溝はなく、床面には焼土はなかった。柱穴状の穴は、数個検出されたが、主柱穴は確認出来なかった。出土遺物は、土師器、須恵器があり、床面近くの出土もあった。25は、須恵器杯蓋で頂部を欠損し、体部中程で棱を持って折れ曲がり、口縁部は細く尖る。26は、須恵器杯身破片で、27は須

須恵器壺部破片である。28は、土師器小形壺で、29も壺である。28の口縁端部は、上方につまみ上げられ、29は外方に伸び、両者の胴部はあまり張らない。遺物と遺構の時期は、7世紀代とする。

SB201（第7・10図、図版4）は、西地区でSB200の東に位置する。平面形は、方形で、斜面下側は確認できなかった。規模は、 $4.5 \times 3.8+ \times 0.4$ で、壁は北西側が一番高い。周溝はみられなかった。北東隅の床には、焼土がわずかあり、壁面にかけてみられた。柱穴状の穴はあるが、主柱穴は確認出来なかった。出土遺物は、土師器、須恵器破片である。34は、壺の胴部から底部にかけての破片である。31は、須恵器杯身で、口縁端部はわずかに外方にそる。他に小破片がある。これらの遺物と遺構の時期は、7世紀代とする。

SB203（第7・10図、図版5）は、西地区でSB201とSD205の間に位置し、周囲に土坑がある。平面形は、長方形と思われるが、東南側が低いため壁がなく規模は不明である。規模は、推定で $4.9+ \times 3.1+ \times 0.35$ で壁は北側が一番高い。周溝は、西壁側で一条あり、幅0.2Mで深さは0.09Mである。床面には、焼土などではなく、柱穴ではないが深さの浅い穴が数個ある。出土遺物は、土師器、須恵器がある。36～41は、須恵器杯蓋で、36～38は、完形品であり、36は焼き重みがある。37は、頂部のつまみが宝珠状に尖り、口縁端部は細く垂下する。38は、頂部のつまみは尖らず、口縁端部は内傾する。42・43は、須恵器杯身で、42は、高台を持ち、ゆるく外方に伸びる深い体部をもつ。43は、無高台の須恵器杯身破片である。46は、土師器壺の口縁部破片で、胴部は張らない。時期は、7世紀代とする。

SB206（第7・10図、図版5）は、西地区でSD205の東に位置する。規模は、 $3.8 \times 3.2 \times 0.2$ で浅く、平面形は台形で、周溝はなかった。床面中央部には、不定形な穴がある。主柱穴は確認できなかった。出土遺物は、土師器、須恵器、石、炭、炭化物がある。図示した土師器と須恵器は、床面近くの出土例で、60は須恵器杯蓋で、つまみ部分を欠き、口縁端部は丸く分厚い。61は、須恵器杯身で、高台を持つ破片である。67～71は、土師器壺口縁部破片である。口縁端部は、67のように「く」の字状に外側に伸びるものと69のようにさらに端部を上方につまみ上げるもの二者がある。70は、胴部が頭よりすばまり、底部となる。他に須恵器の壺部破片などがある。時期は、7世紀代とする。

SB207（第7・10図、図版5）は、西地区でSB200とSD106の間に位置する。平面形は、台形で、規模は $3.7 \times 2.7 \times 0.1$ で、周溝はなかった。出土遺物は、土師器、須恵器がある。74は、床面近く出上で、宝珠状のつまみと肩が張る体部から直線的にのびて口縁となる完形品で、ゆがみ、内面にへら先で描かれた「十」字もしくは「X」状の線刻がある。時期は、7世紀代とする。

大型住居（SD106・107・205・231・、SK134・137・223）は、調査区の中央部で検出されており、平成6年度調査時点で、北側の一部を検出していたもので継続調査となつた。遺構の位置は、調査区のほぼ中央部で、北西側からの斜面が途切れても最も平坦な場所である。遺構は、SD106・107・205・231、SK134・137・223とその内部が一体となり住居となる。北西側斜面地に斜面上側に溝を巡らす住居群一列中のSB116の軸と同一線上にあり、等高線と平行となる。遺構は、溝二条が平行に巡るもので、外側の溝は、北西側だけにみられる「コ」の字状となり、SB116・118と同様である。東南側は、一部切れているもののSD231が続いていると推測される。SD231の幅は、0.3Mで、深さは浅く0.1M以下である。北東側はSD231とSK134までの間は溝は確認できなかった。溝の規模は、SD106の内側で長軸12.7M、短軸8.5M（約 7×4.7 間）で、面積は $107.9m^2 : 32.7$ 坪あり、SD107の外側では、長軸13.2M、短軸10.9Mとなる。溝の規模は、幅40×最大深40CMで「U」字状を呈している。底面の高さは、水平で、北西側が一番深く掘込まれている。北東部では、SK134の場所で二条の溝が合流し細くなる。溝SD106・231に開まれた内側は、ほぼ水平で、柱穴状の穴が多数ある。この溝で開まれた様子は、SB116と同じと思われ、内部に住居があったとして記述する。柱穴の可能性のあるものは第6図に示したP1～P19（以下Pを省略する）である。1・2と3・4は、互いに対象の位置関係にあるようで4個を結ぶと四角くなる。また、2と4のほぼ中間には、5があるが、3・4間で5に対峙する位置に柱穴が存在しないため現段階では不明である。6と10にSK211に接する穴と加え、さらに1・2を加えると溝SD106・231に沿うように並ぶ。11～13は、本遺構の長軸線上にある。14と15、16と17、18と19、20と21の8個の穴は、互いに相対した位置にあり、外側の溝SD107上及びその外側にある。

その中で、14と15の穴は、6と8を結ぶ線上にある。20と21の穴は、9と10を結ぶ線上にあり、14～19の柱列間の間隔からは、少し離れる。これらの穴が柱穴となる可能性がある。溝SD107より外側にある土坑では、SK134と235、SK223と222も対応している。遺構と遺物の時期は、7世紀代とする。

SK137（第6図）は、前年度に調査しており、北西側の辺中央部で外側の溝と切り合っている。底面からは、須恵器杯身二枚が重なり出土した。その遺物の出土地点は、外側溝の位置に当たり、溝と土坑は同時期である。

SK223（第6図・図版6）は、大型住居の南西にあり、この土坑からSD205が伸びている。平面形は、長方形を基本とし、規模は $0.9 \times 0.6 \times 0.4$ である。89は、土師器高杯脚部端部破片で、91は土師器壺口縁部破片である。前年度に調査したSK134も同様であり、両土坑は同様の性格を持ち対峙している。

SD205（第6・9図・図版4）は、SD106から南西側（斜面側）に伸び、幅は0.4M、深さは200M前後で、SD106の底面高さと同じ水平に伸び浅くなる。遺物は、土師器、須恵器があり、53は、須恵器高台付杯身で、54は須恵器壺胴部破片である。57・58は、土師器杯で、57の底部外側にはへら先による「十」字の線刻がある。55は、土師器高杯で、「ハ」の字の脚に丸みを持つ杯に稜を持つ立ち上がりながら開き、大きく外に張り出す口縁端部となる。59は、土師器壺である。溝で区画された内側からの遺物出土は少なかった。

SD106（第6・9図・図版4）は、前年度調査区で検出された溝の続きであり、溝の形状なども同様である。1は、須恵器高杯脚部破片で、中央部に巡られた二条の沈線を挟んだ上下に細長い透かしを4個づつ持つ。2は、須恵器壺破片で、3は外側に聞く高台を持つ須恵器壺底部破片である。5は、土師器高杯で、杯部口縁は直線的に斜め上方に伸び、体部は緩やかな丸みを持って脚部に向かう。脚部は、棒状脚状の上部から「ハ」の字状に外側に聞く。杯・脚部ともに口縁部と体部との境目にあまり明瞭ではないが稜をもつ。4は、5の杯部と同様の器形をしている。6は、「ハ」の字状に外側に聞く土師器高杯の脚部と思われる。7は、丸い体部を基する杯で、口縁端部を尖らせながら外側につまんでいる。8・9は、土師器壺である。9は、全器形がわかり、口縁部は、「く」の字状に直線的に伸び、端部は丸い、長い胴部は、半分よりやや下位に胴部最大径があり、底部は平底である。8は、9と同じ器形をしたものと思われ、内外面に細かいクシ状具によるハケ目がみられる。

SD107（第9図・図版4）は、前年度調査区で検出された溝の続きである。10は、須恵器壺口縁部破片で、端部は不明で、上部に一条の突帯がある。その下部の部位で二条の沈線が巡り、頸部へとつながり、口縁端部と頸部以下を欠損する。11～14は、須恵器壺胴部破片である。15は、須恵器壺胴部破片で、16は土師器壺胴部破片である。

溝（SD）は、大型建物に付くもの以外では、SD213一条が確認された。

SD213（第8図・図版5）は、調査区中央部で大型建物の東に位置する。溝は、北東から南西に等高線に平行するよう緩やかな弧を描き伸び、南側で大きく曲がり東南方向に少し伸び終わる。規模は、 $10.0 \times 0.5 \times 0.1$ で、浅い。78・79は、土師器壺胴部破片で、北東で出土している。時期は、7世紀代である。

土坑・穴（SK）は、今回の調査区中央部で大半が検出され、東南側などの斜面下で数個確認された。

SK204・214・215・219・220・253の7個は、調査区中央部で大型建物の西にあり、SB203との間にまとまっていた。

SK214（第11図・図版5）は、長方形の内面の壁が焼けている焼壁土坑である。規模は、 $1.7 \times 1.6 \times 0.6$ である。内面焼け具合は、よく焼けており、前年度焼壁土坑と同様である。80は、須恵器高台付き杯身で、下方に伸びた高台から直線的に上方に伸びて口縁部となる器形である。81は、須恵器壺胴部破片である。82は、土師器壺胴部破片である。時期は、7世紀代である。

SK210は、調査区中央部で大型住居の南で、断面形は「コ」字形で深い例である。規模は、 $1.3 \times 1.2 \times 0.6$ である。

SK224（第8・11図・図版5）は、調査区中央部でSB203の東側にある。規模は、 $0.8 \times 0.7 \times 0.1$ である。90は、土師器壺で、口縁部から胴部までの破片である。時期は、7世紀代である。

SK225（第5図・11図・図版5）は、調査区中央部でSB118とSB135の間にある。平面形は、長方形で内部が二つに分か

れており、さらに同様の土坑が接している。規模は、 $1.7 \times 0.8 \times 0.4$ である。92は、須恵器杯蓋で、頂部のつまみ部分と半分を欠く。平坦な天井部から直線的に斜め外方に伸び、先細る口縁端部となる。93・94は、上師器要破片で、前者が小さなものである。95は、砥石で、良く使用するために砥面の中央部は窪んでおり、両端が欠損しているものの4面全部を使用している。98は、紡錘車で、円盤の直径は約50Mで、98Bの写真は原寸のX線写真である。時期は、7世紀代である。

SK251は、調査区中央部でSD205の東側に接している。遺構の上面には、焼土が僅かにあった。規模は、 $2.2 \times 1.8 \times 0.2$ Mで浅く、遺物は少なく小破片であった。

SK226は、調査区中央部でSK225の南にあり、規模は、 $0.2 \times 0.2 \times 0.1$ Mである。96は土師器壺口縁部破片である。

SK245（図版5）は、調査区北西斜面部でSB200と201の中間にあら。平面形は、方形、断面形は「匁」字形で、規模は $1.0 \times 1.0 \times 0.3$ であり、比較的大きな土坑である。遺物は97の内面黒色の碗と思われる小破片がある。

SK246（第11図・図版5）は、調査区中央部の北東にあり、平面形は不整形で、規模は、 $1.7 \times 0.7 \times 0.3$ である。100は土師器壺口縁部破片である。時期は、7世紀代である。

包含層（XY）出土遺物 102～105は、須恵器杯蓋破片で、内面にかえりを持ち胎土や焼成が良好なものである。106は、須恵器杯蓋破片で、口縁端部が下方に下がり、丸細くなる。107・108は、須恵器杯身で、後者は高台が付く。109は、須恵器高环脚部で、4個の方形透かしがあり、その下位に一条の沈線が巡る。端部は外側に大きく開く。110・111・114は、須恵器壺胴部破片で、112は須恵器壺口縁部破片、113は須恵器頸部破片で縁系の自然軸がかかっている。115～118は須恵器壺胴部破片である。119は、土師器杯身で風化が激しいが、須恵器の生焼けに近い。120は、土師器小型壺で、121は土師器杯である。122～124は、土師器壺口縁部破片である。132は、土師器で、前年度に出土した埴輪に近い土管状遺物である。これらの遺物の時期は、7世紀代を中心とする。

③中世以降

中世以後の明確な遺構は、確認されなかったが、遺物は調査地区全体から出土した。

128は、越前系壺胴部破片である。129は、珠洲壺胴部破片で、130は、珠洲摺鉢破片で、一単位のおろし目が見え、その間隔は荒い。131は、砥石で、両端がかけているが4面を使用している。135は、炭である。その他の珠洲破片などを含めた時期は、珠洲編年の3期を中心とする。

III 調査の結果

ここでは、今回調査区と平成5年度からの調査結果を合わせてまとめる。前年度までの遺構や遺物の詳細は刊行済みの報告書「橋本1974他」を参照願いたい。

遺跡の範囲 遺跡の範囲についてみてみると、これまでの調査により推定範囲がより南西側に伸びている。そして、今年度の調査により遺跡のはば全体の調査が、終了したことになるが、南西側には、現段階では工事計画のない丘陵斜面地があり、そこには遺構が伸びており、今後工事が計画された場合は、事前の調査が必要となる。

遺跡の時代 本遺跡は、縄文時代（中期）から人の活動が開始され、古墳時代を経て、古代（奈良・平安時代中心）になり多数の人々がここで生活いろいろな物を生産し、中・近世になると人々の生活拠点は当時以外に移るもの当時の遺物が存在している。

遺跡の種類 古代以外は、遺物散布地で、古代は集落が形成されている。

遺構と遺物 縄文時代 縄文時代の遺構では、土坑が確認されている。遺物では、中期の土器・土製品と磨製石斧・石器剝片などがあり、本遺跡の中では貴重な遺物と言える。

古墳時代 古墳時代では、土器高杯と共に玉製品の原材料である碧玉の加工途中で出る剥片が土坑SK218内から出土しており、玉生産の決め手はないが注意すべきものである。

古代 古代では、住居跡の中で、外側（斜面下側）に排水用の溝を持つものは3棟ある。中央部平坦面で検出された大型のものは、規模が長さ14M×幅11Mあり、内側面積で約105m²、31坪となる。北西斜面側は溝を二重とし、さらにその溝に溜まった水を抜くためと思われる溝が南西に延びている。この住居は、人の日常生活の場と考えるより、当地域一帯の調査結果などと規模の大きさなどにより生産や制作などの場とみたま。また、同様の形態で、規模が小さい例は、北西斜面側で2棟検出されており、等高線に平行し、近接して一列に並んでいる。この2棟は、床面積が20m²、7坪以上ありここでは中規模である。しかし、この2棟は、一般の住居（日常生活の場）と思われる。一方、形状は異なるが、一般的な住居（日常生活の場）と思われるものは、中央部平坦面で4棟、北西斜面側で2棟確認されており、長軸方向は等高線に平行するものが多い。焼土を持つのは西端の一例のみである。これらは、明確な柱穴などは確認されていないが、土坑とみるよりは覆土内の遺物量や形状などから住居と考えられる。遺物では、一部に古いものや新しいものが混在するものの大まかに7世紀代の時期を当てることができる。これらが住居となった場合、北西斜面側上位に3棟が、互いに5M程の間隔を隔てて等高線に平行に並ぶ。さらに北西斜面側下位の1棟と中央部平坦面の北西側の2棟が同様に並ぶ。そして、中央部平坦面中央の2棟も同様である。また、北西斜面側から中央部平坦面方向でみても一列に並ぶ配列となっており、ほぼ同時期にかなり計画的に建物配置がなされていた可能性がある。

土器など土器生産をした可能性ある焼壁土坑がある。これらの土坑は、東南側斜面地と中央部平坦面でそれぞれ単独で存在する。残りの2基は北西斜面地で等高線に平行し、近接して一列に並んでいる。焼壁土坑は、流団調査でこれまでに数多く検出されているものであり、方形で掘り込みも深いものについては、土器焼成窯の可能性がある。

多くの造構は、上面がかなり耕作などにより削平されている。造構の最下面近くしか残されていなかった。そこで、前年度までの調査で検出された段状造構や溝などを見直してみると、造構の最下面しか検出していない可能性もあり、これまでの当地域一帯での調査で多く検出された住居跡と同様例であることなどから住居の一部となる可能性がある。

土管状遺物は、今回でも小破片が1点出土した。前にも述べたが、ここでは、形状などから埴輪の可能性があるとする。また、SK225からは、紡錘車が出土しておりこれらの遺物なども注目される。

中世 中世以降では、珠洲などの土器のほかにP10出土古鏡などがある。

最後に、調査並びに遺物及び資料整理と報告書作成などにご協力くださいました方々に謝意を表します。

IV 参考文献

- 分布調査 富山県教育委員会 1976 「昭和51年度 富山県遺跡分布調査報告書」
- 第2次 富山県教育委員会 1980 「富山県小杉町・大門町 流通業務団地内遺跡群 第2次緊急発掘調査概要」
- 第10・11次 富山県埋蔵文化財センター 1993 「富山県小杉町・大門町 流通業務団地内遺跡群 第10・11次緊急発掘調査概要」
- 第12次 橋本正春 1994 「富山県小杉町・大門町 流通業務団地内遺跡群 第12次緊急発掘調査概要 No.15A遺跡」 富山県埋蔵文化財センター
- 第13次 橋本正春 1995 「富山県小杉町・大門町 流通業務団地内遺跡群 第13次緊急発掘調査概要 No.15A遺跡」 富山県埋蔵文化財センター
- 富山県 1976 「富山県史 通史編」 原始・古代
- 富山県 1972 「富山県史 考古編」
- 富山県埋蔵文化財センター 1994 「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」
- 小杉町 1959 「小杉町史」

表4 平成5~7年度調査遺構一覧

平成7年度

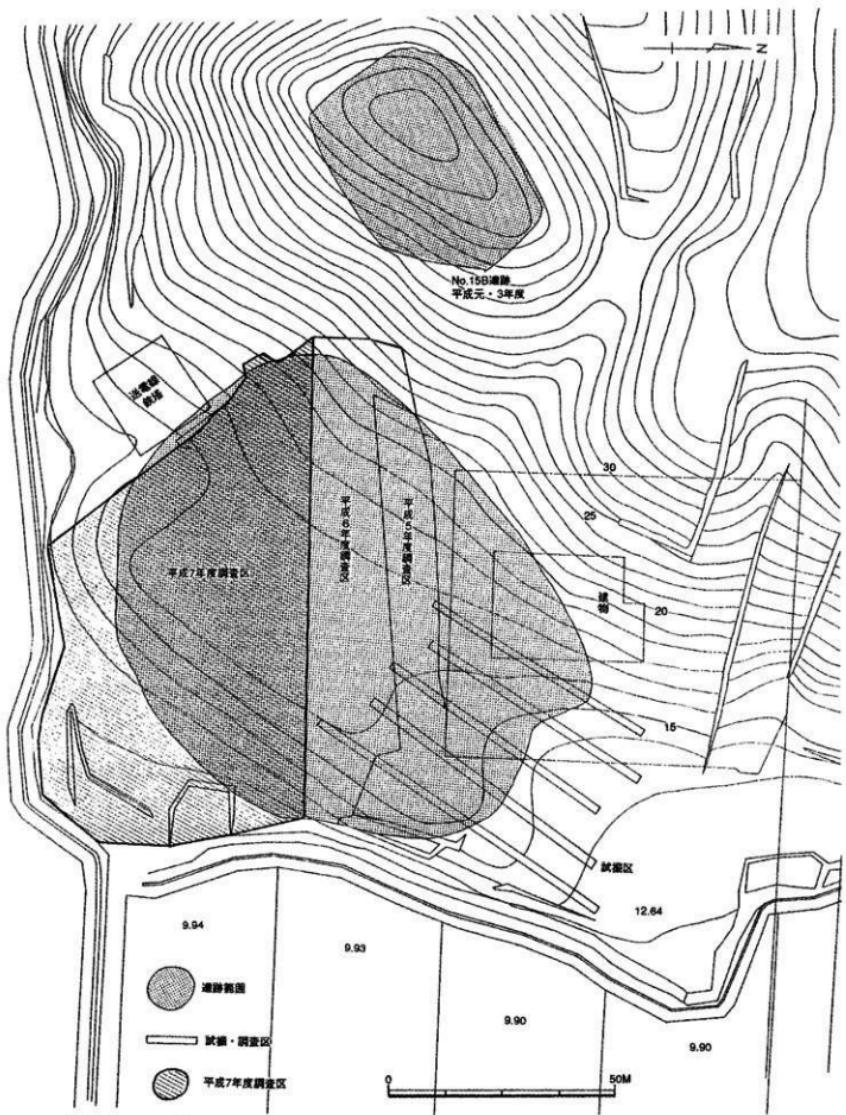
遺構番号	出土区	時期	形状	規模(長軸×端軸×深さ・単位M)	備考
番号 X 1 大型住居	Y 31~37	41~49	古代 方	軸方向:北西~南東(北東~南北) 端方向長:13.2×10.9M SD205を含めた北西軸長22.0M 内削面幅:107.9m ²	須恵器 土師器(杯内黒) 南祖器 石 SD106~107・231・SK134~137・205~223で構成される
SD106	32~36	42~46	古代 方	北西辺9.0・南西辺6.0・北東辺4.0×3.3×0.4M	土師器杯内黒、須恵器 SD205に統合して調査
SD107	32~37	41~46	古代 「コ」の字	北西辺10.0・南西辺7.0・北東辺5.0×0.4×0.5M	土師器、須恵器、陶磁器 SD205に統合して調査
SK134	36	46	古代 長円形	1.0×0.8×0.5M	土師器
SK137	36	42	古代 長方形	1.1×0.6×0.5M	SD107と同時期 須恵器
SD205	27~32	39~43	古代 北東・南西	14.5×0.5×0.3M	土師器、須恵器、石 SD106・SD107に接続
SK223	31	43	古代 円形	0.9×0.6×0.4M	土師器
SD231	31~33	47~49	古代 北東・南西		SD106の続
2 SB118	35~38	31~33	古代 方形	6.0×4.7×0.4M	土師器、須恵器 平成6年度より継続調査
3 SD119	35~38	31~33	古代 「コ」の字	0.5×0.5M	土師器、須恵器 SB118の周構 平成6年度より継続調査
4 SB135	35~37	39~41	古代 方形	4.3×3.0×0.3M	土師器、須恵器 平成6年度より継続調査
5 SB200	32	27	古代 方形	3.6×2.0×0.4M	土師器、須恵器
6 SB201	29~30	30~32	古代 方形	4.5×3.8×0.4M	土師器、須恵器
7 SK202	24~28	31~32	古代 不定形	1.5×1.2×0.8M	土師器、須恵器
8 SB203	31~33	36~37	古代 長方形	4.9×3.1×0.4M	土師器、須恵器
9 SK204	32	40	古代 円形	1.8×1.2×0.2M	土師器、須恵器
10 SB206	28~29	43~44	古代 台形	3.8×3.2×0.3M	土師器、須恵器、石、炭化物、炭化物
11 SB207	19~20	43~44	古代 方形	3.7×2.7×0.3M	土師器、須恵器
12 SK208	24	45	古代 円形	0.5×0.5×0.3M	須恵器
13 SK209	21	47	古代 円形	0.6×0.6×0.3M	土師器
14 SK210	29	46	不明 方形	1.5×1.2×0.4M	
15 SK211	34	48	古代 不定形	0.8×0.7×0.2M	土師器 SD106・107内部
16 SK212	31	49	不明 不定形	1.0×0.7×0.2M	
17 SK213	27~31	48~51	古代 北東・南西	10.0×0.4×0.2M	土師器 弧状
18 SK214	33	39	古代 方形	1.7×1.7×0.6M	土師器、須恵器、石 底面と壁面は焼成SK219と接する
19 SK215	33	38	古代 方形	1.1×1.0×0.2M	土師器、恵器
20 SK216	31	38	古代 円形	0.6×0.5×0.2M	土師器
21 SK217	27	50	古代 円形	0.7×0.5×0.2M	土師器
22 SK218	28~29	50~51	古代 円形	1.1×0.9×0.4M	土師器、剥片、炭化物
23 SK219	33	39	古代 円形	1.5×0.7×0.2M	土師器 SK214と接する
24 SK220	32	38	古代 不定形	1.3×1.0×0.3M	土師器、炭化物
25 SK221	35	45	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器 SD106・107内部
26 SK222	30~31	44~45	不明 円形	0.3×0.3×0.1M	
27 SK224	31~32	38	古代 方形	0.8×0.8×0.1M	土師器
28 SK225	35	36	古代 方形	1.8×0.8×0.4M	土師器、須恵器、石、炭化物、劫鉢車
29 SK226	35	36	古代 円形	0.2×0.2×0.1M	土師器
30 SK227	30~31	39	古代 円形	0.7×0.7×0.2M	土師器
31 SK228	29	39	古代 円形	0.5×0.5×0.2M	土師器
32 SK229	35	56	古代 不定形	3.4×1.8×0.2M	土師器
33 SK230	35	48	古代 円形	1.7×1.4×0.4M	須恵器 SD106・107内部?
34 SK232	23	44	古代 不定形	1.2×1.0×0.2M	土師器
35 SK233	27	43	古代 円形	0.8×0.5×0.3M	土師器
36 SK234	34	42	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器 SD106・107内部
37 SK235	35	47	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器 SD106・107内部
38 SK236	34	44	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器 SD106・107内部
39 SK237	34	46	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	石 SD106・107内部
40 SK238	34	47	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器 SD106・107内部
41 SK239	34	45~46	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	SD106・107内部
42 SK240	32	48	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器 SD106・107内部
43 SK24	30	43	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器
44 SK242	32	41	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器
45 SK243	32	42	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器
46 SK244	31	42	古代 円形	0.3×0.3×0.1M	土師器
47 SK245	31	30	古代 方形	1.0×1.0×0.3M	土師器
48 SK246	33	54~55	古代 不定形	1.7×1.0×0.2M	土師器

遺構番号	出土区	時期	形状	規模(長軸×端幅×深さ:単位M)	備考
49 SK247	28・29	49・50	古代	円形	0.8×0.7×0.3M
50 SK248	32	42	古代	円形	0.3×0.3×0.1M
51 SK249	28	45	古代	円形	0.6×0.5×0.3M
52 SK250	24	45・46	古代	円形	0.7×0.6×0.3M
53 SK251	28	41	古代	不定形	2.2×1.9×0.2M
54 SK252	28	41	古代	円形	0.6×0.5×0.2M
55 SK253	31	39	古代	不定形	1.3×1.0×1.0M
56 SK254	35	52	不明	円形	0.8×0.5×0.2M
57 SK255	18	57	不明	方形	2.1×1.6×0.5M
58 SK256	16	60	古代	円形	0.3×0.3×0.1M
					土師器炭化物・焼付粘土塊

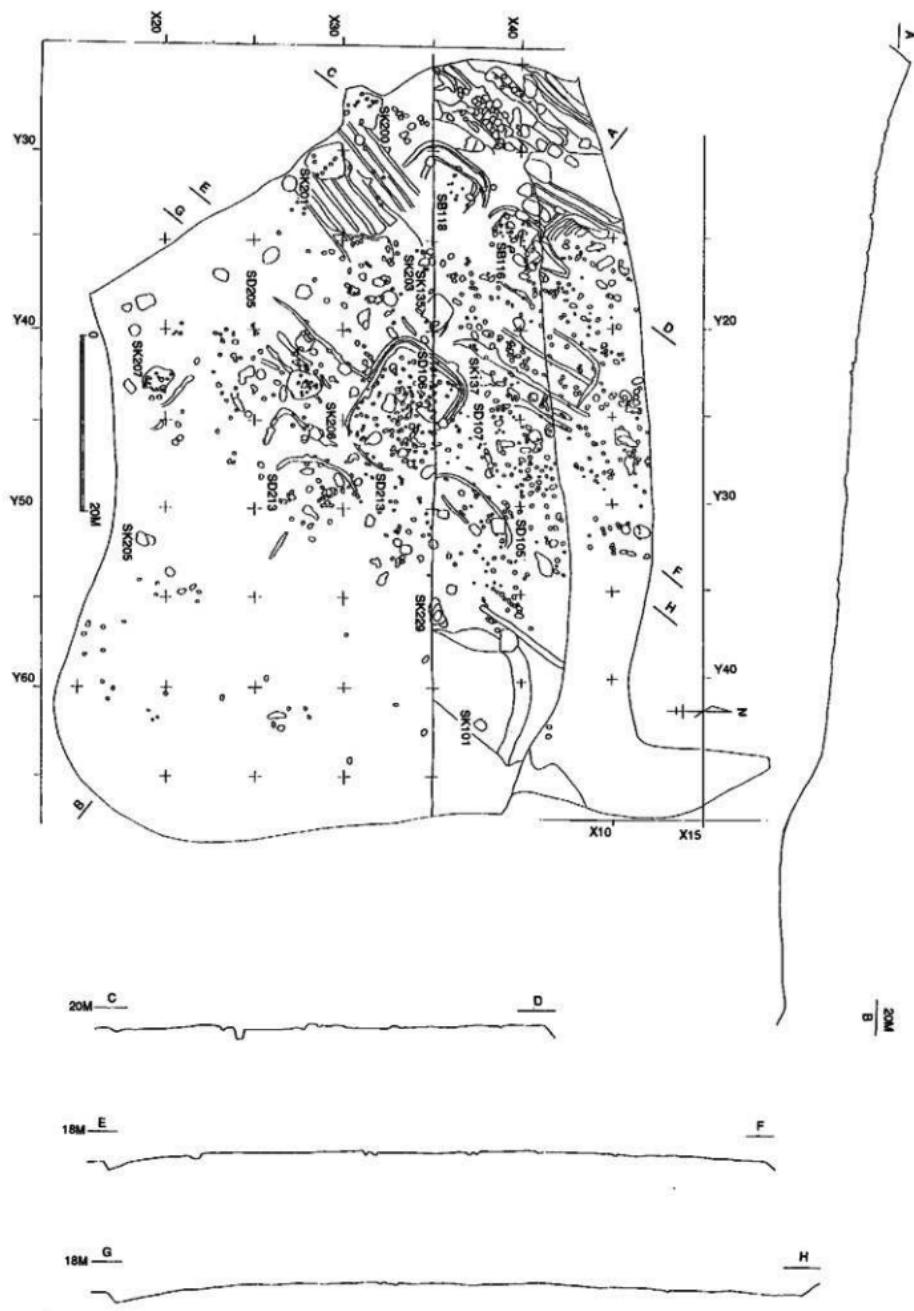
平成5・6年度

遺構番号	時期	形状	備考	遺構番号	時期	形状	備考
1 SK 1	古代	方形		2 SK 2	不明	方形	
3 SD 3	古代	北西～南東		4 SD 4	古代	北西～南東	土師器、石
5 SD 5	古代	北西～南東		6 SD 6	古代	北西～南東	
7 SD 7	古代	北西～南東		8 SK 8	不明	長方形	
9 SK 9	不明	長方形		10 PI0	古代	円形	土師器、古鏡：元宝通寶？
10 PI1	不明	円形		12 PI2	不明	不定形	
13 PI3	不明	円形		14 PI4	不明	円形	
15 PI5	不明	円形		16 PI6	中世	円形	陶器越前系
17 SD17	古代	縄文土器・土師器		18 PI8	不明	円形	
19 P19	不明	円形		20 P20	縄文	円形	縄文土器
21 P21	古代	円形		22 P22	古代	円形	土師器 灰 烧粘土塊 流土
23 P23	不明	不定形		24 P24	不明	円形	
25 P25	不明	円形		26 P26	古代	方形1.5	
27 SD27	近世	南西～北東	陶磁器	28 SD28	近世	南西～北東	
29 SD29	近世	南西～北西		30 P30	不明	円形	
31 P31	古代	円形	土師器	32 P32	古代	円形	土師器
33 P33	古代	円形	土師器	34 P34	古代	円形	土師器
35 P35	古代	円形	土師器	36 P36	古代	円形	土師器
37 P37	古代	円形	土師器	38 P38	古代	円形	土師器
39 P39	古代	不定形	純土器 赤石剥片 土師器	40 P40	古代	円形	土師器
41 P41	古代	円形	土師器	42 P42	不明	円形	
43 P43	古代	円形	土師器	44 SK101	古代	方形	焼盤
45 SK102	古代	正方形	土師器	46 SK103	古代	長方形	鋤片
47 SK104	古代	不定形	土師器	48 SK105	古代	中央～東	土師器
49 SK108	古代	長方形	土師器	50 SK109	不明	長方形	
51 SK110	古代	方形	燒盤 上師器 烧粘土塊	52 SK111	古代	長方形	土師器
53 SK112	不明	南西～北東		54 SK113	不明	正方形	
55 SK114	不明	南西～北東		56 SK115	不明	不定形	土坑2個
57 SK116	古代		土師器、須恵器	58 SD117	不明		
59 SD120	不明			60 SD121	不明		
61 SD126	古代	不定形	土師器 烧粘土塊 炭化物	62 SD127	不明	南西～北東	
63 SD128	不明	北西～南東		64 SK129	古代	長方形	土師器、須恵器
65 SK130	古代	長方形	土師器	66 SK131	古代	方形	土師器
67 SK132	古代	長方形	土師器	68 SK133	不明	長方形	
69 SK136	古代	円形	SB116内 上師器	70 SK139	古代	円形	土師器
71 SK140	古代	円形	土師器	72 P148	縄文	方形	肩製石斧
73 SK149	古代	方形	土師器				

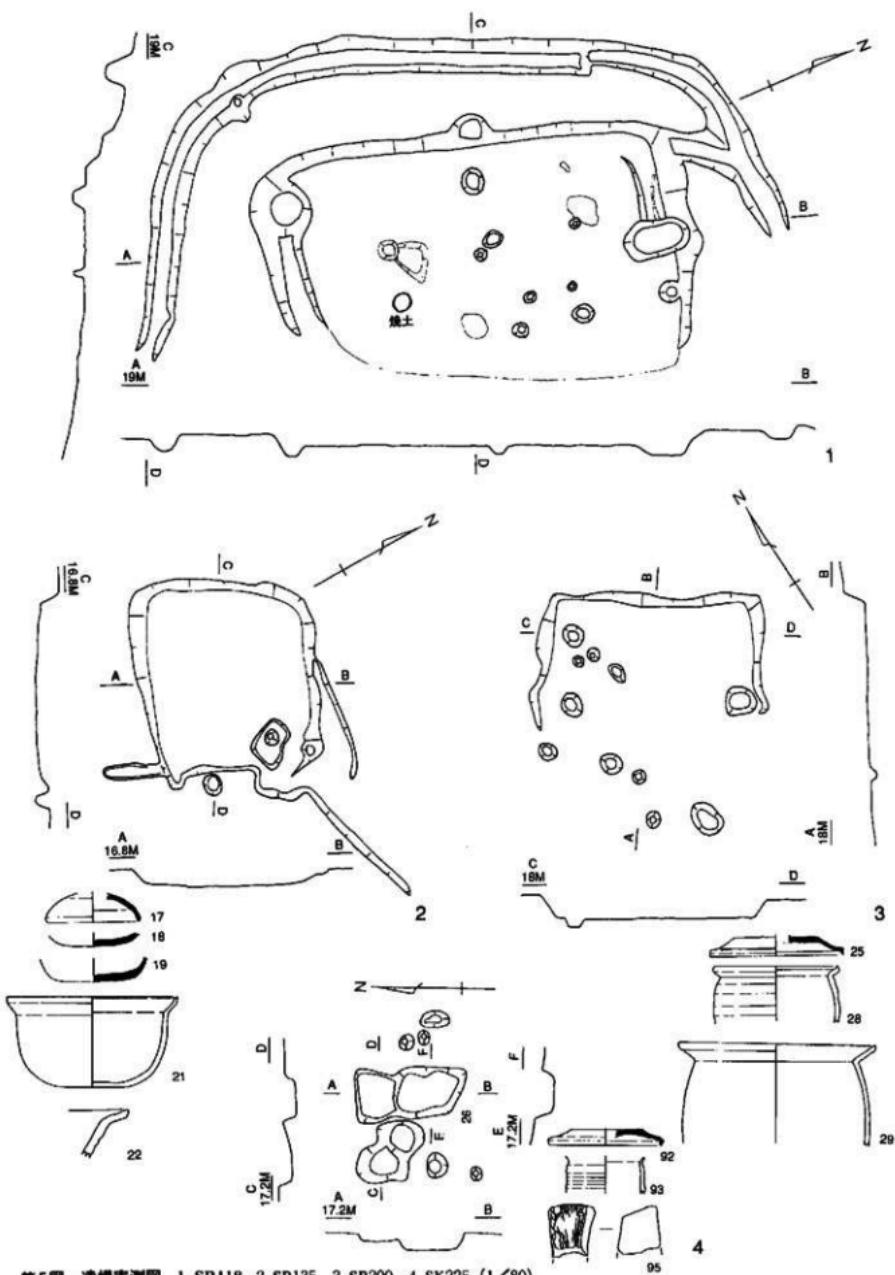




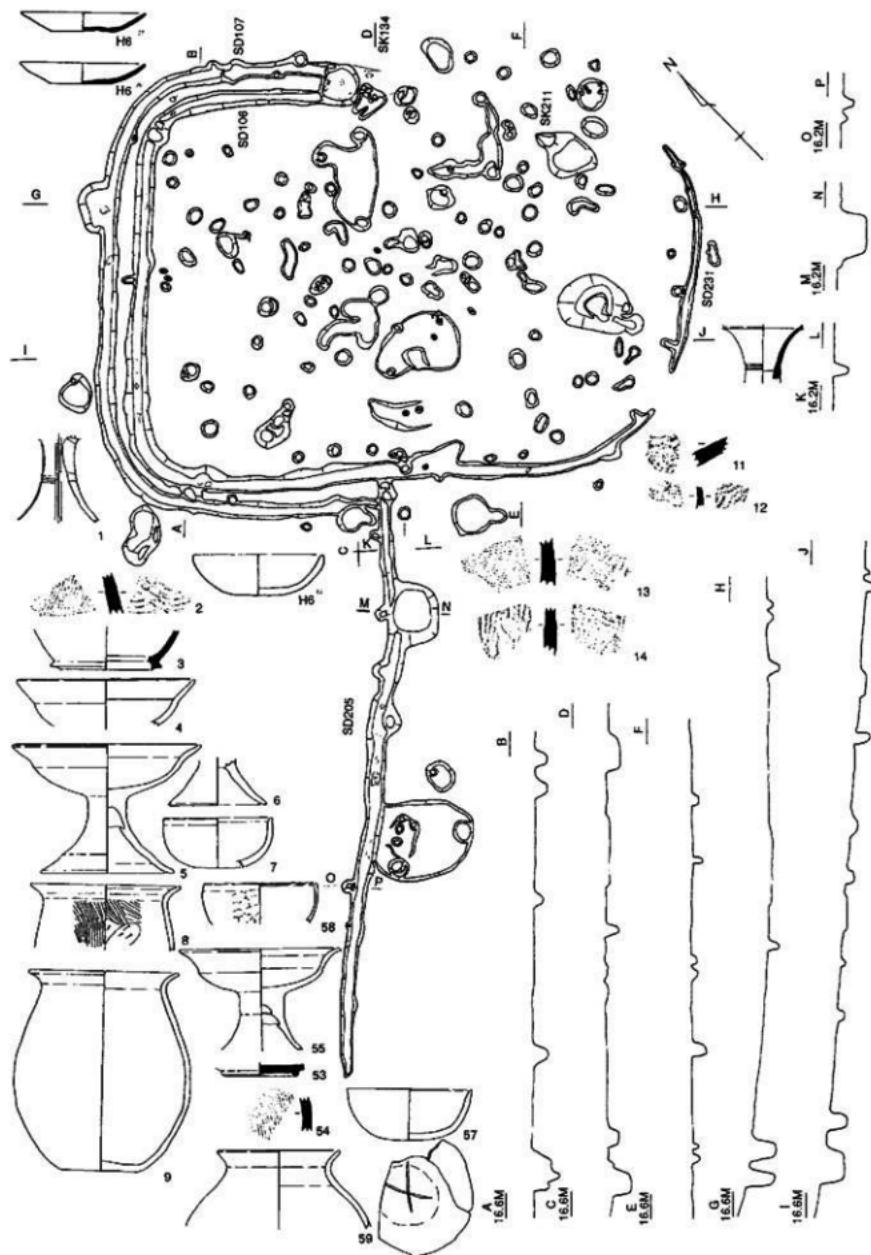
第3図 No.15A跡跡の試験区と調査区 (1/1,000)



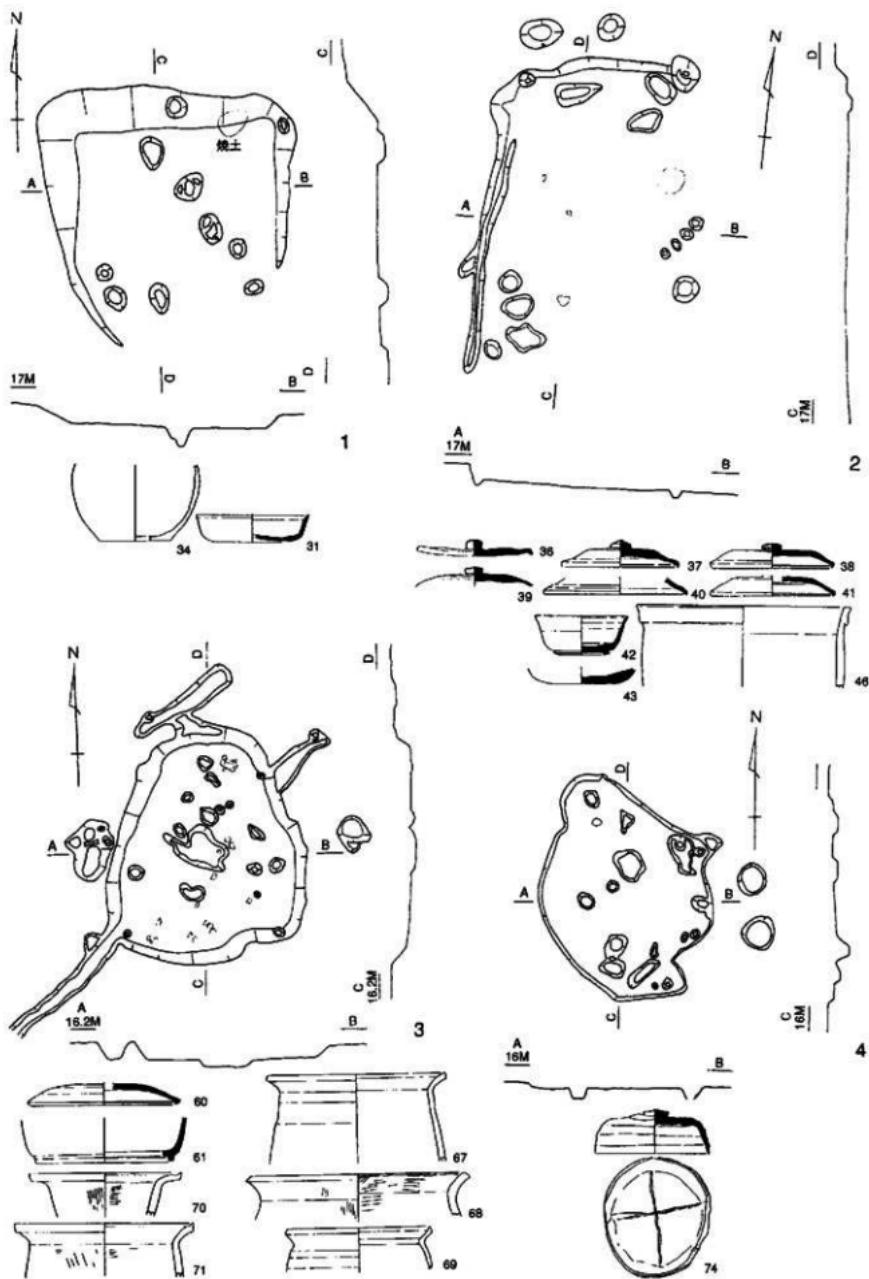
第4図 遺構概略図 (1/600)



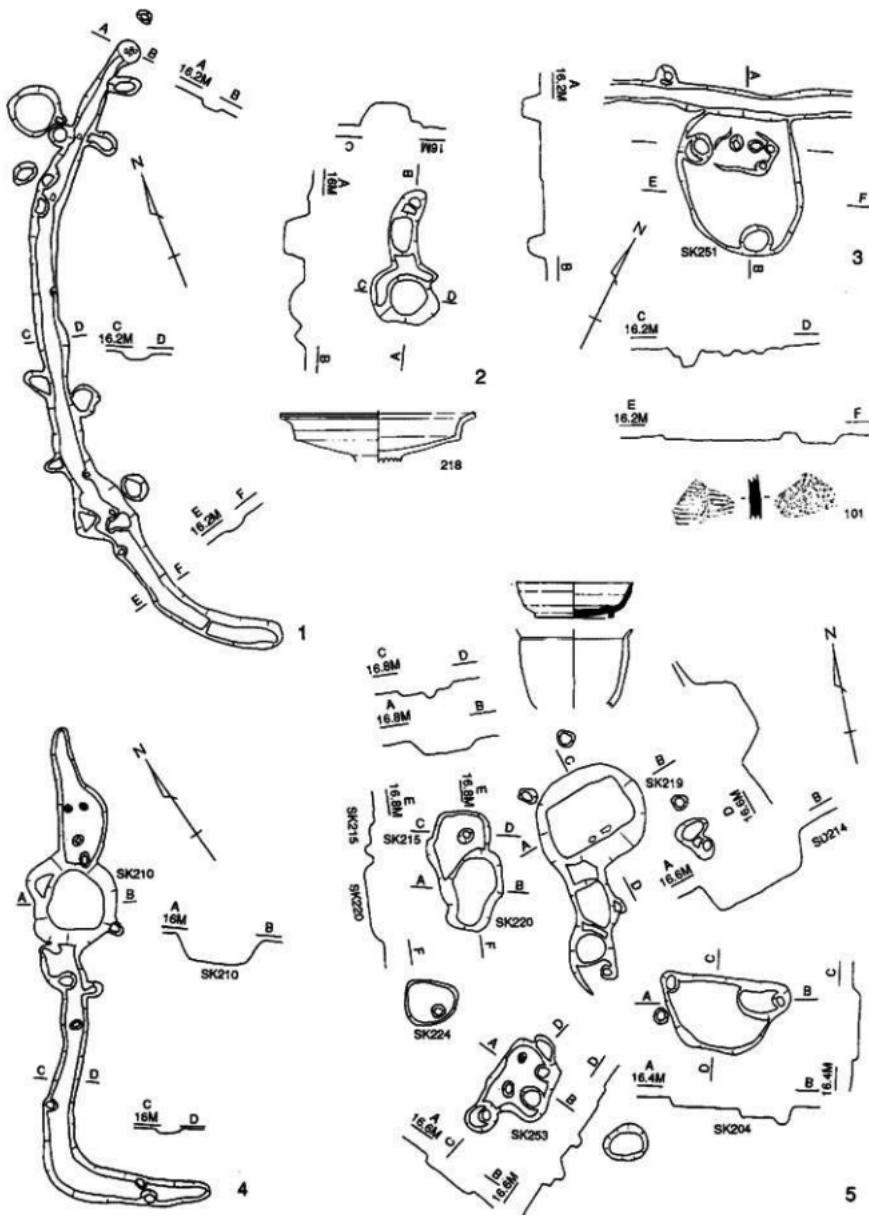
第5図 造構実測図 1.SB118 2.SB135 3.SB200 4.SK225 (1/80)



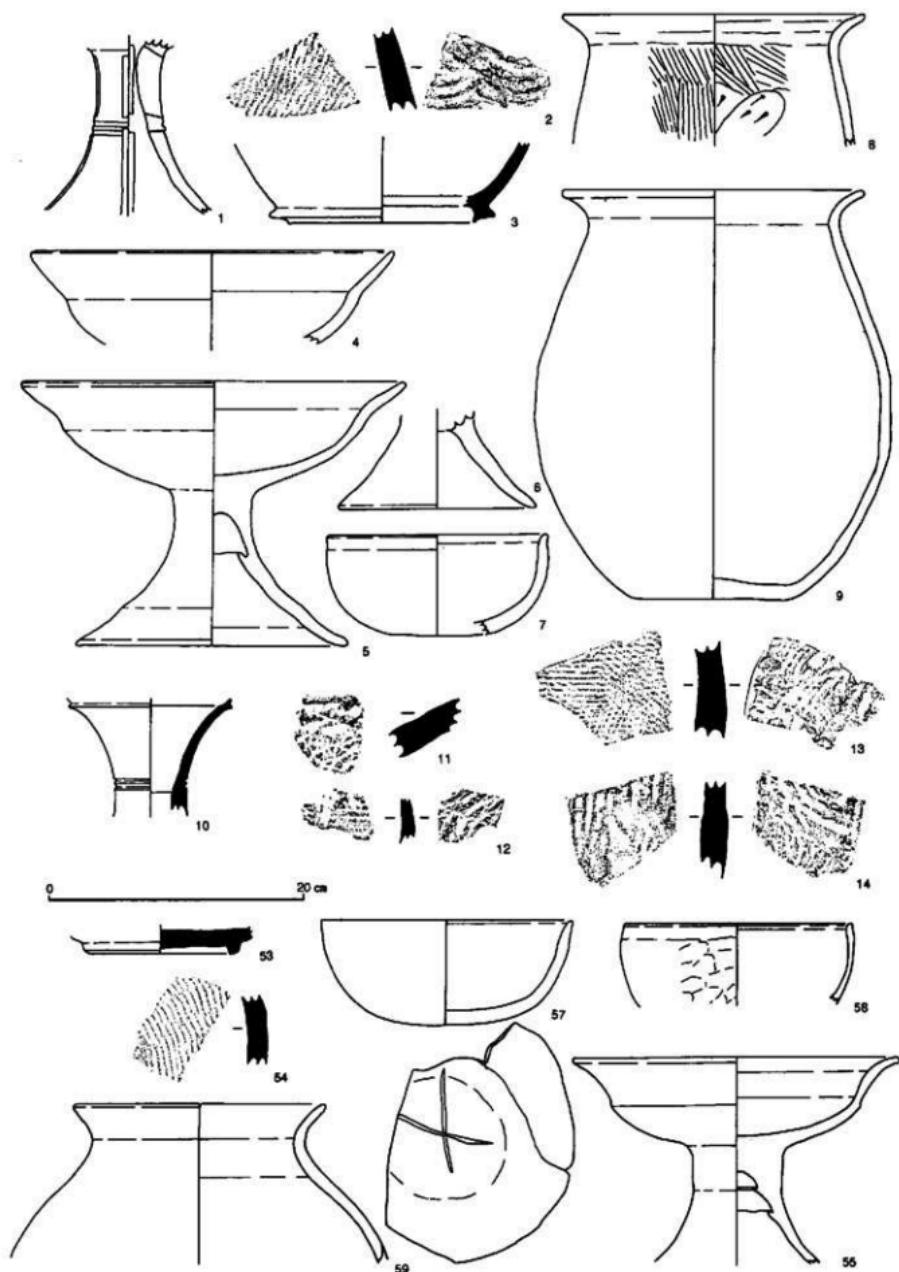
第6図 造構実測図 1.SD106 107 205 231 2.SK134 137B (1/100)



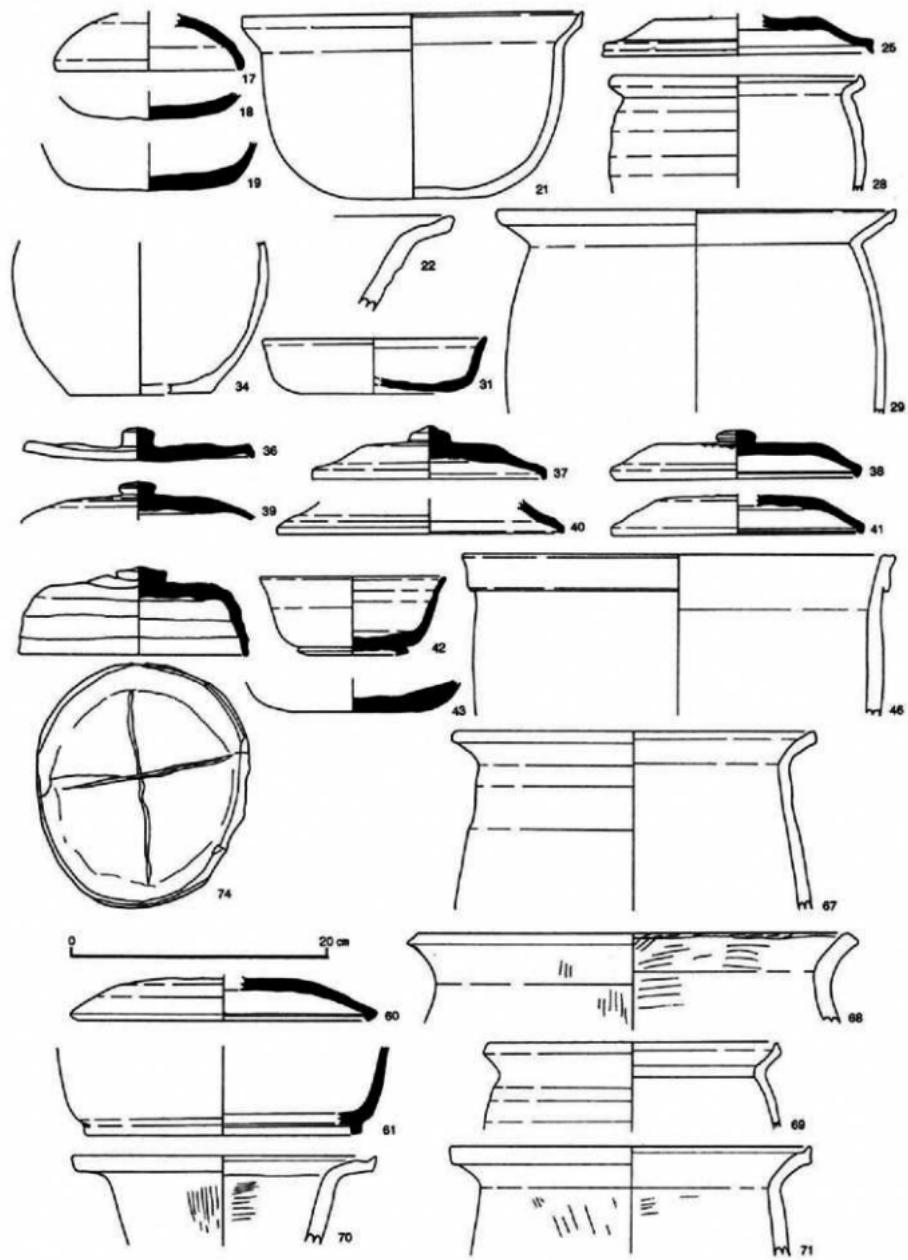
第7図 造構実測図 1. SB201 2. SB203 3. SB206 4. SB207 (1/80)



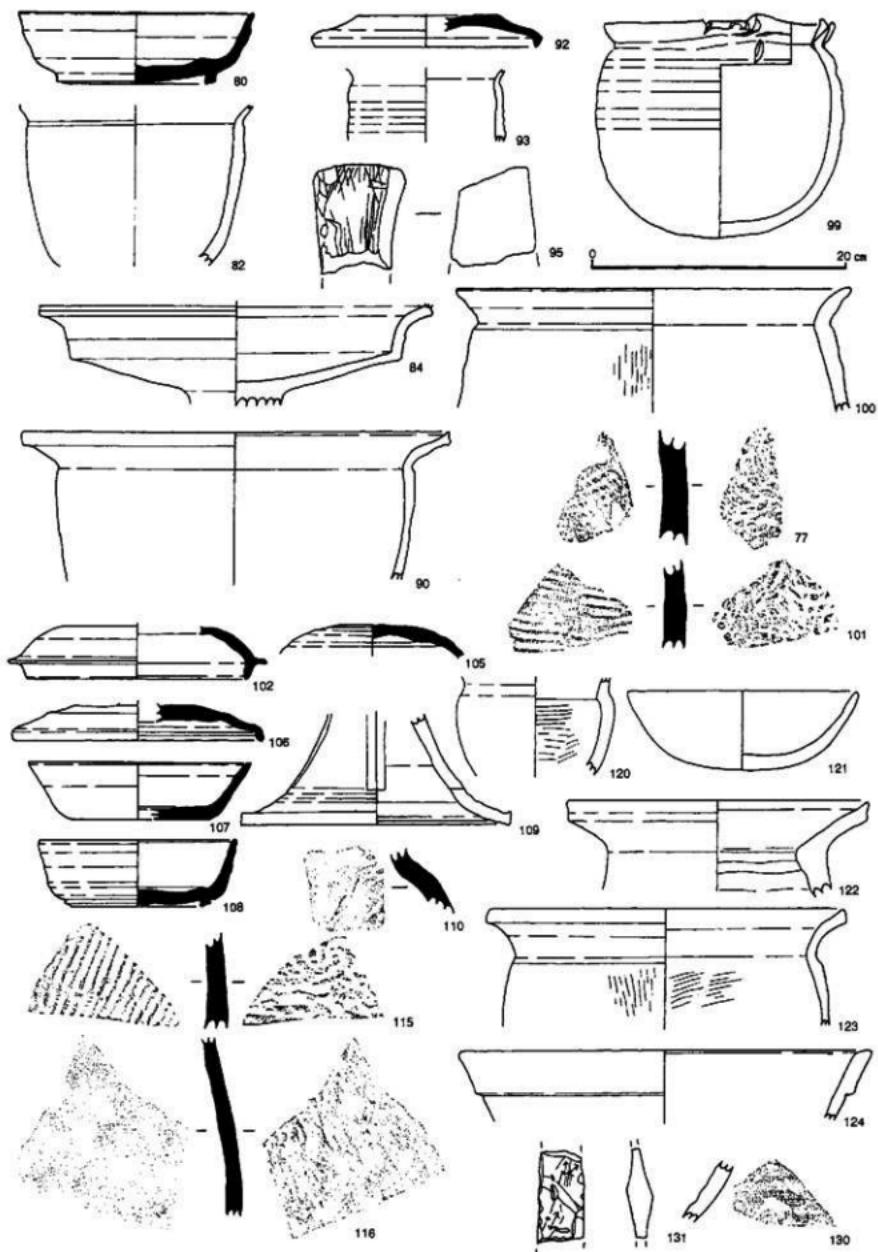
第8図 遺構実測図 1. SD213 2. SK218 3. SK251 4. SK210 5. SK204・214・220・224・253 (1/80)



第9図 遺物実測図 SD106:1~9 SD107:10~14 SD205:53~59



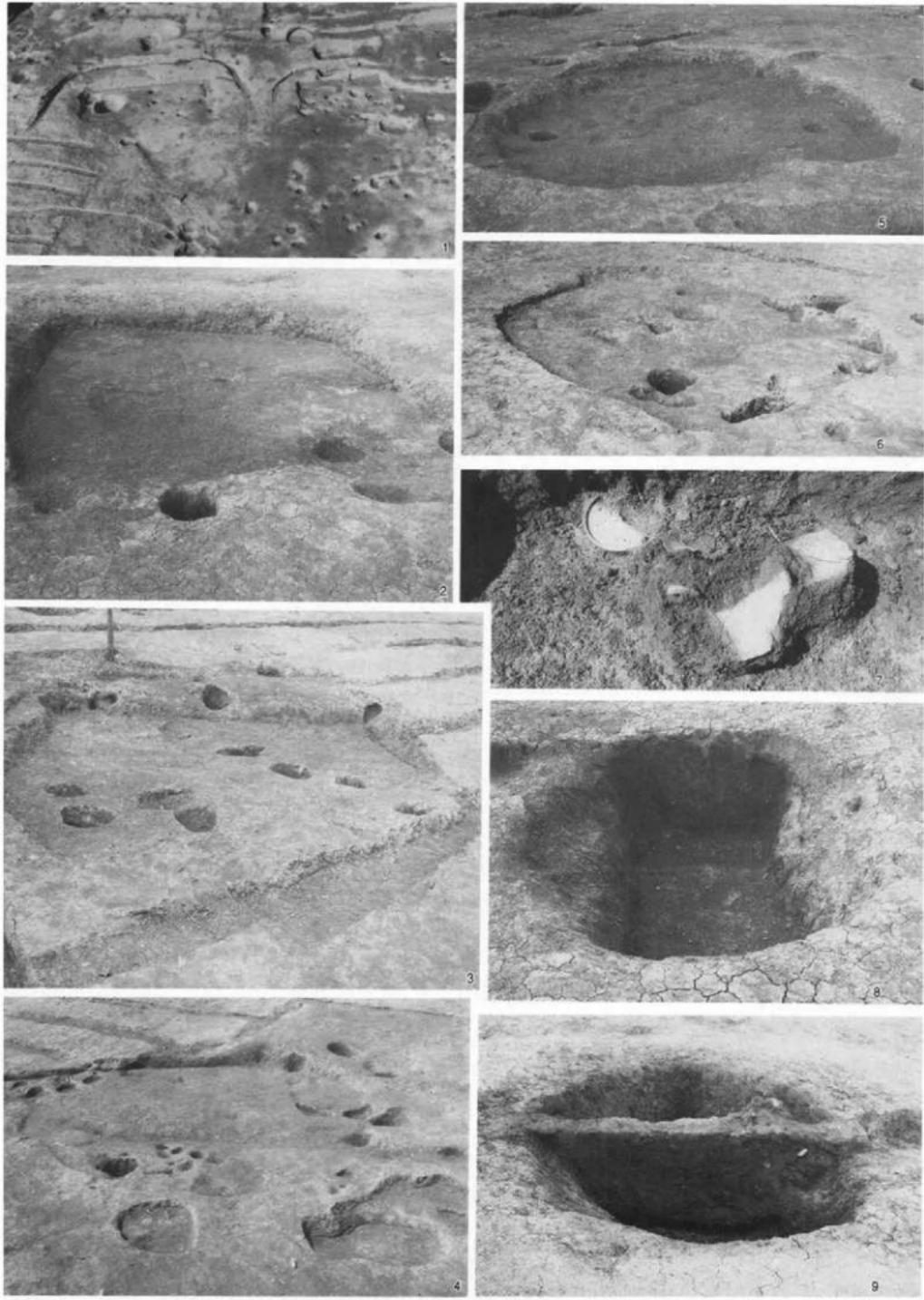
第10図 遺物実測図 SB135:17~22 SB200:25~29 SB201:31~34 SB203:36~46 SB207:74
SK206:60~71



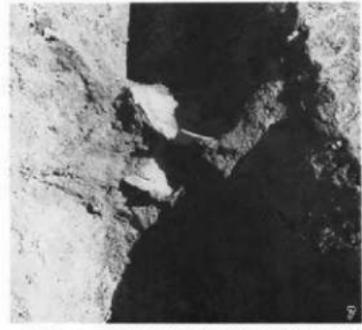
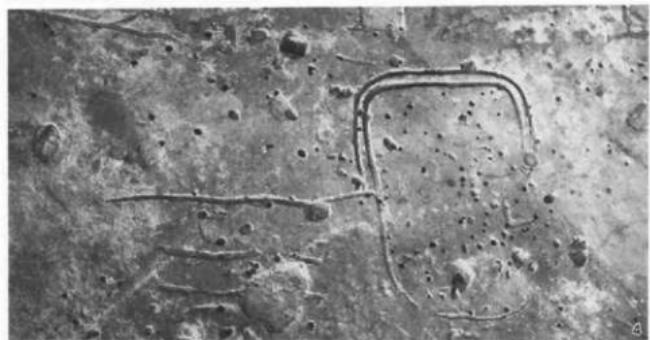
第11図 遺物実測図 SK214: 80~82 SK225: 92~95 SK218: 84 SK224: 90 SK246: 99・100 SK208: 77
SK251: 101 XY: 102~131



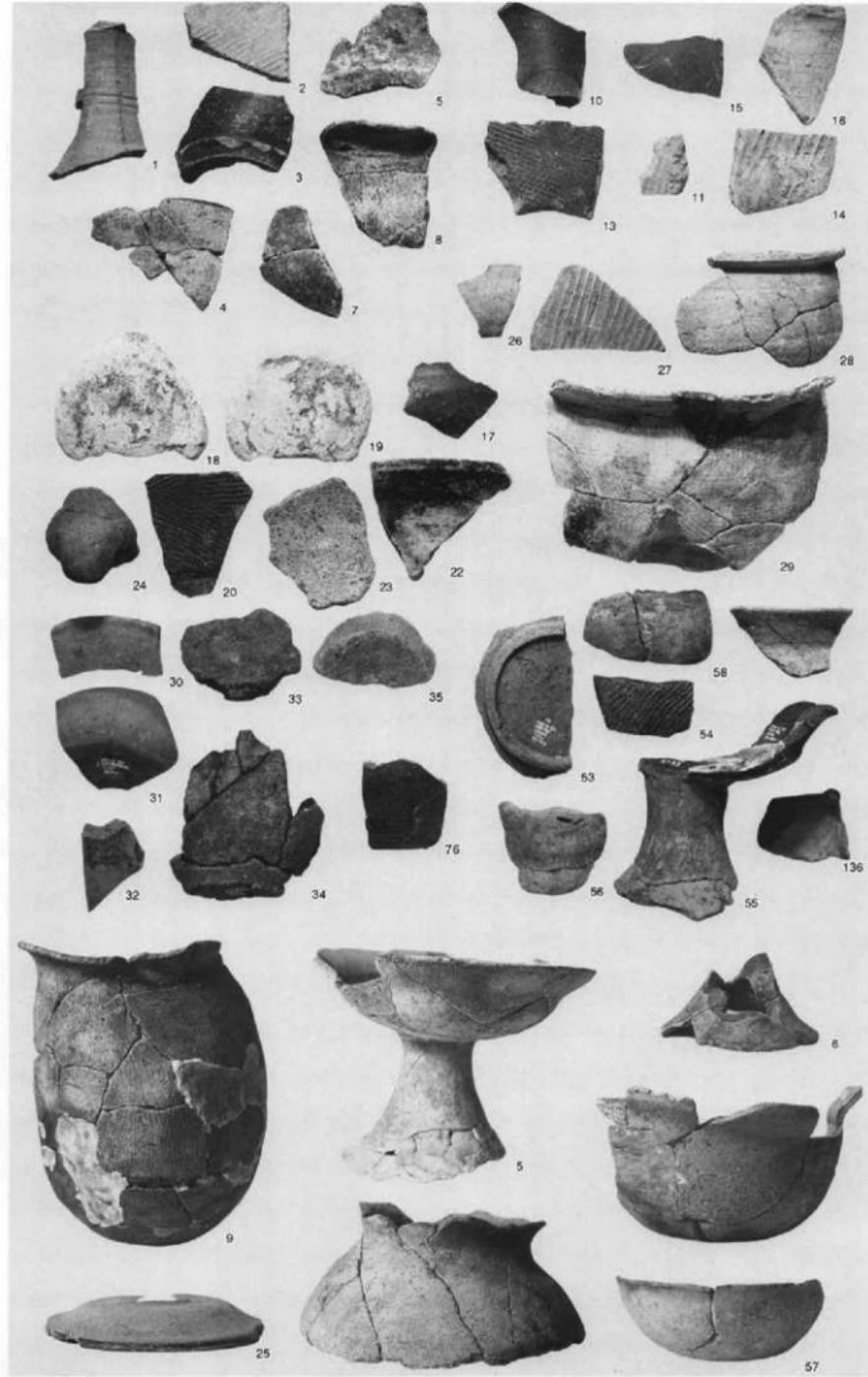
図版1 運動会場
1.東より 2.北より 3.西より



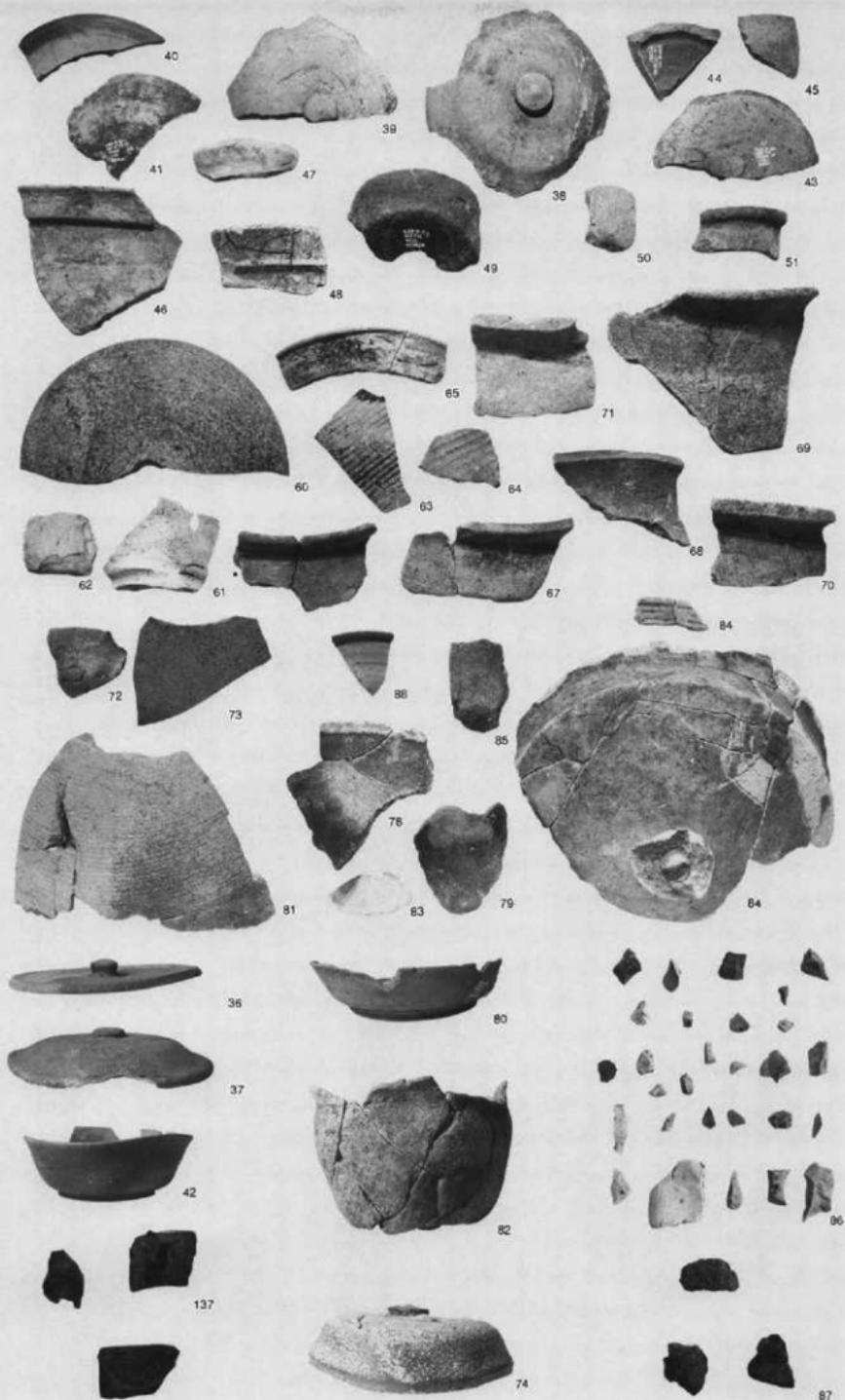
図版2 1. SB116, 118 (東より) 2. SB135 (南より) 3. SB201 (南より) 4. SB203 (東より) 5. SB207 (南より) 6. SB206 (東より)
7. SB206 (出土状況) 8. SK214 (南西より) 9. SK214 (南より)



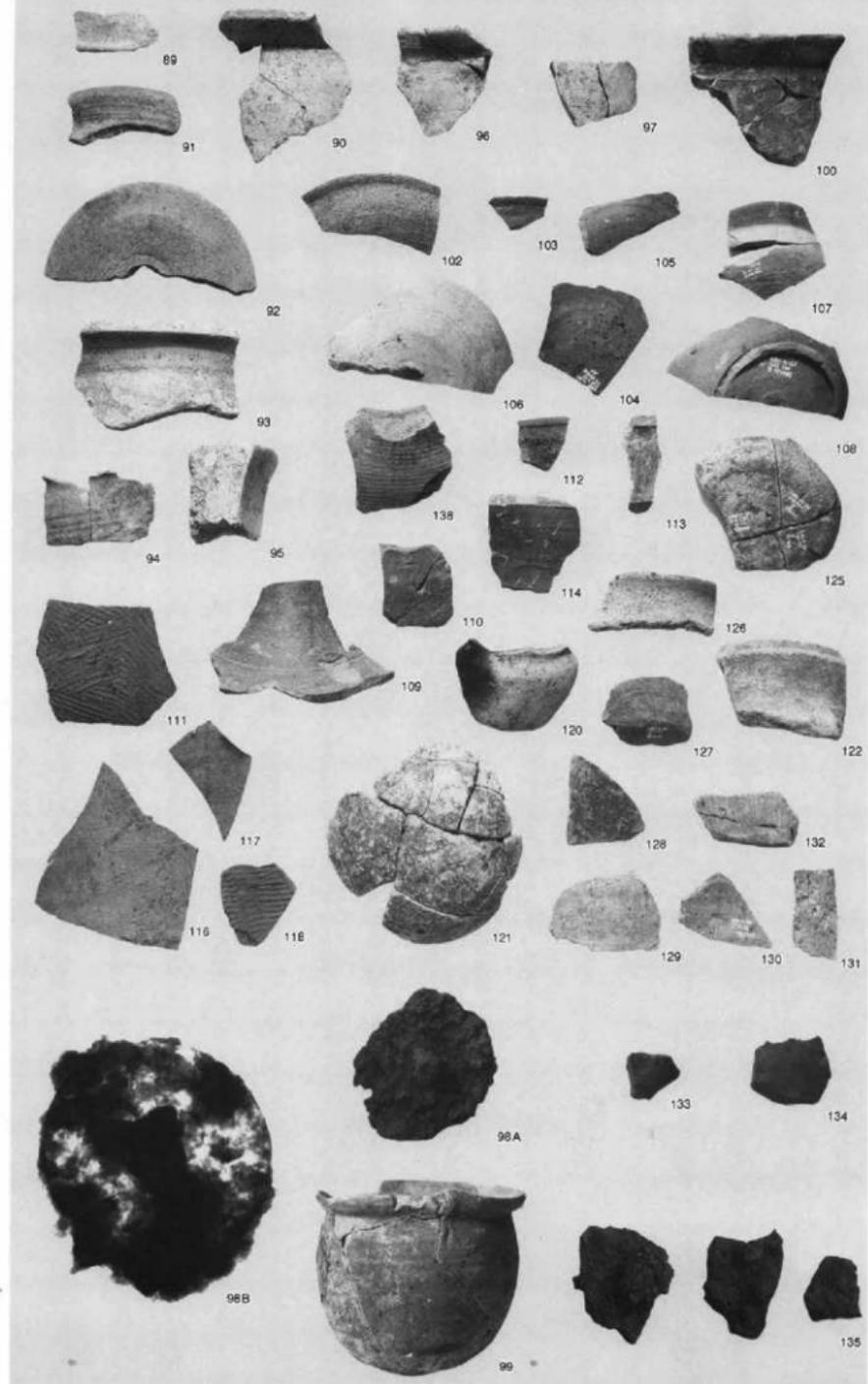
図版3 1. SK225・226南より 2. SD213南より 3. SD213出土状況 4. SD106・107・205・231, SK134・137他東より 5-9. SD106出土状況



图版4 出土遗物 SD106:1~9 SD107:10~14 SB135:17~22 SB200:26~29 SB201:30~35 SK204:76 SD205:52~58·136



圖版5 出土遺物 SB203:36~51·137 SB206:60~75 SB207:72~74 SK214:80~82 SD213:78~80 SK218:84~87 SK215:88



図版6 出土遺物 SK223:89・91 SK224:90 SK226:96 SK245:97 SK246:99・100 SK225:96・92・95 XY:101～135

報告書抄録

ふりがな	とやまけんこすぎまち だいもんまちこすぎりゅうとうぎょうむだんちないせきぐんだい じはくつちょうさかいよう	いせき
書名	富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第14次発掘調査概要No.15 A 遺跡	
編著者名		
編集機関	富山県埋蔵文化財センター	
所在地	〒930-01 富山県富山市茶屋町206番3号	
発行年月日	1996年3月	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
流団No.15 A 遺跡	富山県射水郡 小杉町青井谷 字丸山	163813	381182	36°41' 137°2'14"	19950802 - 19951031	2,500	流通業務 団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
流団No.15 A 遺跡	集落	绳文 古墳 奈良・平安 中・近世	縄文土器(中期主体 有補修孔土器片・ 織維含有土器片)、剥片 土器(器台・高杯)、碧玉剥片 土器(瓶・瓶・杯身・内黒杯・内黒高杯)、 須恵器(壺・横瓶・瓶・杯身・杯蓋) 珠洲(壺・すり鉢・瓶)・古銭(天正通寶・ 元豊通寶)・陶磁器他(八尾・越中瀬戸)	土坑 土坑 大型住居・堅穴式住居跡・柱穴・土塙(燒 壁土塙)・溝 柱穴・溝

富山県小杉町・大門町
小杉流通業務団地内遺跡群
第14次発掘調査概要
No. 15 A 遺跡

平成8年3月発行

編集・発行 富山県埋蔵文化財センター

富山市茶屋町206番3号
TEL 0764-34-2814
FAX 0764-34-2859

印刷所 日興印刷株式会社